楽たま通信

令和元年度
No. 8

良城小
2019/05/20
増野

これから数百年後の吉敷に思いをはせて　～赤田神社参集殿の竣工～

土曜日に、赤田神社の社務所兼参集館の竣工祭がありました。

赤田神社は、一昨年に遷座１３００年を迎えた大変由緒ある神社で、赤田地区だけでなく、吉敷地域全体の繁栄を願う地元の神社として多くの方々の参拝があります。本校児童も、３年生の地域学習で毎年見学しています。

今回新しく建てられた参集館は、屋号を「紡ぎの舎（つむぎのや）」と言うそうです。これは、神社が「地域づくりの核」「人々の心のよりどころ」となることを願う神社関係者の皆さんの気持ちが込められています。

今後は、この建物で、講座や行事を開催し、地域に学びの場と活躍の場を提供したいと言っておられます。

この参集館は木がふんだんに使われた、本殿に大変よくマッチした建物となっています。

赤田神社の社殿は１５４３年に大内義隆が造営したと言われ、約５００年前の大変由緒ある建物です。新しい参集殿もこれからずっと何百年も地域に愛され、活用されることを願って、コンクリートではなく木を使った建物にされています。何百年か後には、今と同じように、この参集殿もすごい歴史を感じるような存在になっていることでしょう。今回、そのような建物の竣工に立ち会えたことは、うれしいですね。５００年前の本殿竣工の祭典は今回よりさらに大きな祭典であったとは思いますが、その頃の吉敷の熱気に思いを寄せることができました。３学年の先生方は見学の際には、そのような人々の思いも是非伝えてください。それが、吉敷を愛する心の育成に繋がります。末田宮司さんにお話を聞くのもいいと思います（末田さんは元PTA会長）。

ところで、この参集殿に使われた木は、阿東の川田材木店さんが調達されたそうです。川田さんは、私が、２４年前に三谷小学校で教えた児童の保護者です。数十年ぶりに偶然出会い、教務主任として、一番元気だった頃の記憶がよみがえってきました。

式典後に川田さんと、お子さんの状況や建物の木材のことについて話をしました。

参集殿に使われている木材の調達は、神社の建築ということでかなり苦労したそうです。

この写真にある中央の梁の「ヒノキ」は、現在、復元工事中の名古屋城で使われる木と同じ木だそうです。四方の柱材は「アスナロ」、最初の写真にあ『紡伎廼舎』と書かれた看板は「トチノキ」です。このトチノキは熊本産で、直径６ｍもある巨木の枝からの製材だそうです。

個人的に、「樹」が好きな私にとっては、材木の話はとてもワクワクしました。これから数百年の歴史を刻むであろう木の建物は、こうやって設計、加工、建築と、多くの人たちの千恵と努力を結集して建てられていくのですね。

今後、赤田神社に行かれたら、是非、この参集殿もご覧下さい。ちなみに、入り口のトイレも山口市により大変きれいに新築され大変快適です。